巻頭言

人が前に進む為に

栃木・呑竜幼稚園園長　小林研介

今、東北関東大震災から二週間がたとうとしている。この号が出されているころに日本の災害史でも未曾有なこの事態はどう推移しているだろうか。今現在で三万人を超える人々が亡くなったり行方不明である。原子力発電所の事故もいまだ推移を固唾を呑み見守るしかないところだ。聞くところによると小さな子ども達の中からも多くの犠牲者が出ているようである。謹んで哀悼の意を表したい。多くの幼稚園、保育園、学校が園舎や校舎を地震や津波で破壊され、子ども達が集まれるまでに多くの時間を要することになるであろう。それにしても自然とは何たる力を持っているものなのか。ギネスブックにのるような世界一の防波堤も木っ端微塵にし、大波が乗り越えてしまった。海岸から相当な距離まで津波は浸食し、避難所さえものみ込んでしまった。「想定外」とは自然の力を侮った言い訳にしか聞こえない。三月十一日のお昼を済ますまでは、被災地の多くの人々が親族を失い、家を流され、放射線の脅威を感じ、寒さと飢えの中で避難所のストレス多い生活をすることになるなど、万に一つも考えていなかったはずだ。しかしこうした事が悲しいかな、人の力とは遠く離れたところで起きうるという事実をいやがうえにも私達は突きつけられてしまったのだ。

こうした絶望の中で人間はどう生きていくのであろうか。「がんばろう日本！」とメディアが繰り返し流してはいるが、はたして頑張れるものなのか。被災二週間がたち日替わりでいろいろな状況がわかってきた。類まれな災害ゆえにその目を覆いたくなるような、いや地獄のような映像がこれでもかと続いた。しかしその中で「人が求めるのは人である」ということが改めて見えてきた。勿論最初に求めたものは、安全な逃げ場所であったはずだ。そして水、衣服、毛布、食べ物、薬と続く。どれも生きるに必要なものだが、肉親の安否が確認された場面や救出や再会の映像を見るにつけ、何よりも人が望んでいるものは愛するものの存在なのだということを感じる。生存が確認されずに、せめて身に付けていた衣類や写真、乗っていた車をと必死に探し求める姿からは、人にとってかけがえのないものとは紛れもなく人なのだということがわかる。愛する家族や友達、同僚、地域の人達の存在こそが生きる勇気や希望を与えてくれるのだ。その意味からも多くの被災地の方々の無事をそしてこれからの支援を願わずにいられない。

今、被災地には「ありがとう」という言葉が満ちているという。東北の方々の慎み深い性格もあろうが、世界中が感心し驚愕しているのは、避難所で互いをいたわり耐え忍び、しかも他者に対しての感謝の念を持ち続ける日本人の心性である。この壮絶な被災の場での日本人の心とはこの「ありがとう」に凝縮されている。「和願愛語」は仏教保育の徳目のひとつだがこうした最悪の状況でも、日本人は救援物資を届けたり、医療を施してくれたり、破壊された原子力施設の中に飛び込む消防や自衛隊の人達に温かい眼差しと、ありがとうの言葉をかけることの出来る民族であることに誇りをもちたい。

同時に日本中いや世界中の人々が自分達がこの災害に苦しむ人の為に何が出来るかということを考えている。それはボランティアの参加や一人ひとりの節電であり、物資の買い占めをしないことであり、義捐金を届けることでもある。当園でも早速、募金を開始したが沢山の方々が賛同していただき、瞬く間に多くの金額が集まった。一言で言って、この行為の原動力は人間としての「共感」にあると思う。「共感」という言葉は今までもよく耳にしていたが、今回の災害では本当に多くの人々が我がことのように感じ、行動していると思う。「同事協力」も仏教保育の徳目のひとつだが、この同事も協力も人間だけにしか出来ない行為なのだ。勿論こうして被災地から遠く離れてどれほど被災者の方々のお気持ちに寄り添えるかわからないが、出来る限り被災者の立場に立とうと努力し、永く永く忘れることなく思いを寄せていくことにしよう。

千年に一度という大災害の復興や多くの人々の心の癒しは簡単なことではない。

しかし、この災害の中で今見られる人としての大切な心のありかたはどんなときにも人間として生きる上で大切な事にかわりないはずだ。

そのうえで、災害からの復興を祈っている。

悲しみを抱きながらも、共に前に進んで行きたい。

合掌